

研究機関紹介 北欧アフリカ研究所 -- NAI

著者	望月 克哉
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	44
号	10
ページ	55-61
発行年	2003-10
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007748

北欧アフリカ研究所：NAI

もちづき かつや
望 月 克 哉

はじめに
40周年記念会議
研究交流
ドキュメンテーション・センター
調査研究活動
政策関連活動
研究活動における特色
おわりに

はじめに

昨2002年、北欧アフリカ研究所（Nordiska Afrikainstitutet/The Nordic Africa Institute、以下NAIと略称する）は創立40周年を迎えた。NAIはもともと1962年にスウェーデンのウプサラ大学で組織されたのち、64年には同国の政府機関となり、さらに北欧諸国の財政支援を得るよう

表 NAIのセクション別スタッフ数

所長 ¹⁾	2
管理	9
図書館	11
広報	7
調査研究	15
出版	6
その他 ²⁾	1
合計	51

（出所）NAI, *Annual Report 2002*, p.47.

（注）1）「所長」には所長補佐を含む。

2）「その他」は国内留学等で休職中の者。

になって、今日では北欧5カ国の共同研究機関と位置づけられている。長らくスカンジナビア・アフリカ研究所（Scandinavian Institute of African Studies）と呼び習わされてきたが、改称されて今日の名称となった。筆者は昨年、客員研究員としてNAIに駐在していたことから、その記念行事にも参加する機会を得たので、研究活動とあわせて紹介してみたい。

40周年記念会議

2002年9月1日から3日間の記念行事の中心は、2日間にわたって開催された国際会議であった。アマルティア・センの講演集のタイトルに想を得たという「知識、自由、そして発展」（Knowledge, Freedom and Development）をテーマに掲げた会議への招聘者は、5名の報告者を含めて、わずかに40名余り。これに50名のNAI職員の半数近くが加わったとはいえ、それは実に「こじんまり」とした会議であり、まるで旧知が集うといった和やかな雰囲気支配していた。北欧諸国の共同研究機関であるにもかかわらず、外交団の参加はアイスランドのみ。政府関係者としてもスウェーデン国際開発協力庁（Swedish International Development Co-operation Agency: Sida）から研究所OBでもある1名が

招かれただけで、この種のセレモニーにつきものの「来賓」などは皆無であった。

報告を行った5名のうち男性は2名で、エチオピアに所在する東アフリカ社会科学研究機構(OSSREA)からのAbdel Ghaffar M. Ahmed教授と、在ケニアのフォード財団から招かれたTade Akin Aina 博士。それぞれ「21世紀において現地知識は適切なものたり得るのか」、「アフリカにおける民主主義発展のディレンマ」と題した講演を行った。前者はリサーチ・コンソーシアムとして、後者はアフリカ域内での調査研究活動のドナーとして、いずれも研究所とのつながりが深い機関であり、両報告者ともNAIでの研究滞在の経験をもつ人物であった。

女性の報告者は2名が大学教授、1名は現役の政治家であった。セネガル出身のFatou Sowパリ第7大学教授は、ムスリム社会に生まれた自らの経験を交えながら「アフリカ女性にとってのチャレンジ」を論じ、他方Penina Mlama教授はナイロビで自ら主催するアフリカ女性教育者フォーラムの活動報告とあわせて「グラスルーツにおけるダイナミクス」を語った。出色だったのは「アフリカの開発の失敗」を講演したEllen Johnson Sirleaf氏の迫力である。内戦状況が続くリベリアの野党のリーダーとして、いまや次期大統領就任も取り沙汰される人物であるが、決して政治家のレトリックとしてではなく、アフリカが直面する問題の核心を突いたその言葉に力を感じたのは筆者だけではなかったであろう。

各セッションでは、報告者とディスカッサントはもとより、座長そしてフロアの質問者までもがファーストネームで呼び合い、発言にNAIをめぐるエピソードがはさまるなど、およそ国

際会議の堅苦しさとは無縁の「討議」が続いた。北欧とアフリカの交流、その結びつきの有り様を目の当たりにする思いであった。

研究交流

NAIのミッションのなかでは、アフリカ研究そのものや文書・資料(映像を含む)の収集・公開とならんで、研究交流が大きな柱とされている。年次報告書にも、その序説に「アフリカ人研究者や研究機関との協力はNAIの活動の必要不可欠な要素のひとつであり続ける」(2002年版、1ページ)との記述があり、引き続きNAIと研究者個人あるいは北欧やアフリカの研究機関とのネットワークの維持に力を入れてゆくことが確認されている。

この方針は、研究交流に関する各種のグラント・プログラムにおいても貫かれている。なかでも重要なのが“African Guest Researchers”と称されるもので、これにより主要な研究プログラムの一環としてアフリカ人研究者を招聘している。本人の研究成果を出版するだけではなく、各自の研究テーマに関する公開講演会・セミナーをNAIが主催し、関連する学会・会議(国外を含む)への参加も可能にしている。滞在中の宿舍の提供はもとより、滞在費用の一部もNAIが負担し、関連活動への参加費用は所属する研究プログラムによってカバーされている。期間3カ月、年間6名という枠こそあるものの、研究活動に専念できる環境の提供はアフリカ人研究者にとって魅力的なものであり、筆者と同時期に滞在した研究者たちも、概ねこれを高く評価していた。

北欧諸国の研究者あるいは学生を対象にした

グラント・プログラムというものもある。それらのなかで“Nordic Guest Researchers”と称されるのが、上述のアフリカ人研究者対象のプログラムを北欧諸国の（特に若手）研究者に適用したもので、期間も同じ3カ月間、同様の条件で研究活動を行う。さらに“Study Grants”と呼ばれる北欧諸国の大学院生（留学生を含む）を対象にしたプログラムは、期間1カ月で、年間27名を受け入れている。こちらは研究所の図書館を利用した文献研究の機会を提供することが主目的だが、他のグラント・プログラムで招聘される客員研究員と同様の研究スペースを与えられ、研究員らから論文執筆のアドバイスを受けることもできるため非常に好評である。このほか“Travel Grants”と称して、研究者のフィールドワークを援助する目的で、アフリカ諸国への往復航空運賃を支給するプログラムがある。こちらの2002年における受給者実績は北欧4カ国で28名であった。

ドキュメンテーション・センター

NAIの図書館は、現代アフリカの専門図書館として、社会科学を中心に5万8000タイトルの単行書や報告書を開架方式により一般の利用に供している。理論書以外は国別に配架され、数として多くはないがアフリカ現代文学や写真集といったものも所蔵されており、そこここにディスプレイされている民芸品とあわせて来館者を楽しませてくれる。明るい窓際に並ぶ閲覧者用キャレル、一角に設けられたセミナー用の小会議室など施設面だけでなく、資料検索システム、“The Nordic Africa Institute’s Online Catalogue”(NOAK)の使い勝手もよく、利用

者にはたいへん便利である。なによりも北欧諸国の居住者なら誰でも借出しが可能で、期間は30日（更新可能）、しかも上限は30冊というのには有り難い。

研究者や学生については、他の利用希望者がいない限り最大150日、冊数無制限の借出しが認められている。上述した“Study Grants”の受給者たちが、日々、共同研究室に書籍を運び、積み上げている様子を想像していただきたい。それらにも増して彼（女）らを喜ばせるのは、開発分野を含め500種余りのアフリカ関連雑誌が所蔵されている点であろう。筆者もNOAKによる事項索引により、これまでは知らなかった雑誌に掲載された論文を見つけ、感心した覚えが一度ならずあった。また客員研究員等を含む研究所関係者に対しては、図書館側が新規受け入れ図書について定期的に内覧会を催し、いち早く新しい書籍文献を手取る機会を与えてくれたことには大いに感激した。

図書館員は約10名と少なく、通常、閲覧業務やレファレンスは1～2名で行っている。もちろん、この人員で多様なアフリカの諸相をカバーすることなどできまいが、それを補っているのが所在地ウブサラにおける図書館間の連携である。歴史あるウブサラ大学図書館はもとより、社会科学系では元国連事務総長を顕彰したダグ・ハマショルド図書館も近隣に所在することから、それらの間で相互利用が実現している。各種グラント・プログラムの客員研究員や“Study Grants”の大学院生がNAIに到着すると、図書館員による「館内ツアー」が用意されているほか、ウブサラ大学図書館の訪問と利用案内もアレンジされるので、各図書館の利用にもすぐに習熟できる。

調査研究活動

北欧アフリカ研究所の調査研究活動は大きく3つのカテゴリーに分かれている。

第1のカテゴリーは、特定の課題について理論的、経験的な理解を増進することを目的としつつ、援助機関による調査研究の応用なども視野に入れたもので、研究プログラム（research programmes）と通称されている。所長が十分な事前準備があるものと認め、かつ北欧5カ国の代表から構成されるプログラム・調査研究評議会の承認を得た問題領域が選定される。実施期間は6年で、各プログラムには専任の研究助手が配置され、調査研究スケジュールの決定はもちろん各種費用の支出についても、コーディネーターに大きな裁量権が認められている。現在は以下の3本のプログラムが進行中である（かっこ内は開始年度）。

“Sexuality, Gender, and Society in Africa”（2000年）

“Post-Conflict Transition: The State and Civil Society in Africa”（2001年）

“Gender and Age in African Cities”（2003年）

第2のカテゴリーは、アイスランドを除く北欧4カ国が、それぞれの国におけるアフリカ研究のコミュニティを代表するという名目でNAIの研究スタッフが配置されていることから“The Nordic Research Group”と称されている。上述した各種グラント・プログラムに対する各国からの申請の処理など事務的な作業はあるものの、各研究スタッフは数年にわたって自身の研究テーマに専念できている。2002年の年次報告には次のようなテーマが掲げられている。

“AIDS Orphans of Africa: Victims or Vestiges of Hope”（1998年）

“Historical Research and Higher Education in Southern Africa”（1999年、2002年終了）

“Modernisation and Stress in Men’s and Women’s Lives: African Experiences”（2001年）

“HIV/AIDS Orphans and the Role of the Churches”（2002年）

“Religious History and Gender Relations in Kilimanjaro, Northern Tanzania”（2002年）

上述した2つのカテゴリー以外の研究プロジェクトは、個人研究に近いもの、あるいはSidaはじめ外部の資金援助で実施されているものなど、それぞれ性格を異にしており、担当する研究スタッフにも非常勤あるいは大学からの任期付き研究員が含まれている。

“Gender Research on Urbanisation, Planning, Housing and Everyday Life”（1994年）

“Cultural Images in and of Africa”（1995年）

“Liberation and Democracy in Southern Africa”（2001年）

“State-Building in Post-Liberation Eritrea: Prospects, Potentialities and Challenges”（2002年）

政策関連活動

ここ数年の傾向として、NAIの「政策関連活動」（policy-related activities）と称する業務が増えた点があげられる。これはNAIが蓄積してきた情報・知識に基づくものであって、年次報告書によれば「それらの目的は、今日的なアフリカの問題に関する政策決定に寄すべく、研究成果や特別研究に基づく背景情報・分析を提供することにある」（2002年版、30ページ）と

されている。

Lennart Wohlgemuth 所長は長く Sida のスタッフとして開発協力の現場で働いてきた実務家であり、彼の就任が影響していることは想像に難くない。スウェーデンをはじめフィンランド、ノルウェイの要請により各国のアフリカ政策あるいは開発協力政策の策定や、それらのフォローアップが行われ報告書の形で提供されており、さらに NGO やメディアにも対象をひろげた各種会議なども開催している。

特筆すべき成果としてあげられるのは、1994 年から 2001 年まで実施された「南部アフリカにおける民族解放 北欧諸国の役割」をテーマとする研究プロジェクトとその成果であろう。南部アフリカ諸国における民族解放闘争への北欧諸国のコミットメントが原資料とともに包括的にレビューされ、すでに 5 冊の報告書として発表されている。このうちスウェーデンに関するものは以下の 2 冊である。

Tor Sellstrom, *Sweden and National Liberation in Southern Africa Volume I: Formation of a Popular Opinion 1950-1970*. 1999. 541 pp.

Tor Sellstrom, *Sweden and National Liberation in Southern Africa Volume II: Solidarity and Assistance 1970-1994*. 2002. 720 pp.

また、それらが依拠したすべての背景資料についても、関係アフリカ諸国からのアクセスが可能な形で収集・整理されており、すでに利用が開始されている。

2002 年には、「アフリカ開発のための新パートナーシップ」(NEPAD) の発表やアフリカ連合 (AU) の創設など、アフリカ諸国をめぐる大きな動きがあったことから、それらに関連するトピックを扱った分析報告が出版されている。

その一例が次である。

Henning Melber, Richard Cornwell, Jephthah Gathaka and Smokin Wanjala, “The New Partnership for Africa’s Development (NEPAD) African Perspectives.” Discussion Papers No.16. 2002, 36 pp.

この他にも紛争状況が続く中部アフリカの大湖地域や西アフリカに関する調査研究活動が継続的に実施されている。

研究活動における特色

1. ラディカリズム

これはもちろんアカデミズムにおけるものであり、その意味では反権威と言い換えてもよいであろう。北欧の政治風土としての社会民主主義、あるいはその外交におけるアジア・アフリカ諸国に対する強い共感・連帯という伝統、等々、その淵源についてもさまざまな説明が可能だろうが、それは NAI を創設したウプサラ大学の先覚者たちから受け継がれてきたものと解釈するのが適当である。研究の上でのラディカリズムは、多分に組織を構成する人々のパーソナリティの反映なのであって、それは現在のスタッフの間にも連綿と生きている。とりわけシニアの研究員たちが示す民族解放運動への共感、あるいは反体制作家・知識人との連帯は、そのあらわれに他ならない。

2. 強いジェンダー意識

こちらでも女性の参画が進んだ北欧社会の特徴を色濃く反映したものと解釈できようが、それは決して前面に押し出されるのではなく、ごく当たり前のこととして NAI とその活動のあらゆる局面にあらわれている。スタッフの構成に

おけるジェンダー・バランスは言うまでもない。ことに研究セクションなどは、筆者の滞在時、研究助手を含めた15名のうち実に10名が女性であった。冒頭の国際会議における報告者もそうであったが、各種グラント・プログラムでの招聘者をもみても、客員研究員には必ず女性がおり、“Study Grants”をうけた北欧諸国の大学院生も圧倒的に女性が多かった。さらに月例の公開講演会・セミナーに招聘される講師陣はもとより、その参加者もほとんどの場合に女性が多数を占める。テーマにかかわらずジェンダー的側面に関する質問・やりとりがないことは希であり、ひとたびこれがトピックとなれば議論はそこに集中して、筆者などは手も足も出なかった。

3. 組織としての自立性

上記以外にNAIの活動の特徴をあげるとすれば、それは自立性という言葉に集約できる。これは組織の意思決定についてだけでなく、個々のスタッフとその業務全般についても言えることで、研究機関として望ましいものであることは間違いない。それには研究所が北欧5カ国の共同研究機関、したがって国際組織としての性格を有することが作用しているのではないか。2002年の事業費の実績でみると、総収入3720万7000クローナ（1クローナ=約13円、当時）の80%が5カ国の外務省による補助金で、それ以外の収入の大部分もウプサラ大学その他からの助成金であり、自己収入はあるものの印刷物販売による103万1000クローナにすぎず、総収入の3%にも満たない。それにもかかわらずレシピアントであるアフリカの側に立った運営ができるのは、特定の国の立場に偏しない国際共同研究機関であり、ドナーとしての北欧諸国がアフリカ政策で足並みを揃えてきたことも大きい。

また組織として明確なミッションをもち、運営の自立性を有することが、研究所としての位置づけをゆるぎないものとしてきたと言えるのではないだろうか。

おわりに

NAIの最上階には明るいコモン・スペースがあり、毎日、朝10時と午後3時の時間帯には三々五々スタッフが集まってきて、カップ片手に話し合う「コーヒー」と呼ばれる慣習がある。打ち合わせあり、出張の土産話あり、ときには議論もある。2週間に1度の全スタッフを集めた定例会議も、この時間帯にかかれば中断して「コーヒー」となる。フレックス・タイム制を採り、ほぼ全スタッフが個室で作業し、文書が概ねPC端末で処理される執務環境では、「コーヒー」が唯一同僚と顔を合わせる機会ともなっている。その場には、客員研究員や“Study Grants”の学生はもとより、ときに外国からの訪問者も請じ入れられて話の輪に加わることになる。そこでWohlgemuth所長が発する常套句は「すべて上手く行っていますか」。なるほど情報の共有こそがNAIの活動をスムーズに運ぶコツなのだと感じさせる「コーヒー」のひとつときであった。

いまやIT化によって、アフリカの情報の入手は格段に容易になった。北欧、はたまた日本といった遠く離れた土地でもリアル・タイムでアフリカ現地の動きを把握できる仕組みが出来上がっている。新聞記事ならば、時差の関係で現地の人々より早く読んでいる者も少なくないはずだ。しかしながら、そうして得た情報を整理し、それを分析・加工し、さらに活用しよう

とするならば、また別の仕組みが必要になる。それらの作業を担う人員と組織、さらにはネットワークが不可欠である。調査研究機関に求められるのが、それらの要素であるとするならば、NAI はアフリカに関して非常によいモデルを提示していると言えるであろう。

参考文献

The Nordic Africa Institute, *Annual Report 2002*.

参考ウェブサイト (<http://www.nai.uu.se>)

(アジア経済研究所新領域研究センター国際関係・紛争研究グループ長)